

SONRISA

そんりさ

Vol.139



グアテマラ
沈黙を破る女性たち

パラヤのコミュニティ教育。紙に動物の絵を描き切り抜く

- | | | |
|----|-------------------------------|---------|
| 02 | グアテマラ「沈黙を破る女性たち」 | ……石川智子 |
| 06 | グアダルーペ組合視察報告 | ……新川志保子 |
| 08 | 天然染色 マヤ女性に伝授 | ……村岡貞男 |
| 10 | 日本ラテンアメリカ子どもと本の会 | ……伊香祝子 |
| 12 | ラ米百景「グアテマラURNGが<脱皮>決議」 | ……伊高浩昭 |
| 13 | アイマラ民話「月は男の子だった」 | ……栗原重太 |
| 14 | メキシコ食巡り「ナスのクリームスープ」…ミゲル・アクーニャ | |
| 15 | ニュースクリップ | ……サザエ |

グアテマラ 沈黙を破る女性たち

石川智子

現在グアテマラでは、内戦中の軍部や治安部隊によるジェノサイドや虐殺、強制失踪についての裁判が動き始め、少数ながら当時の中尉以下軍人などが有罪判決を受けたケースもある。

一方、虐殺などと同時に体系的に行なわれた性暴力については、社会の認識や関心は低く、有罪となったケースもない。

しかし今、戦時性暴力被害者女性の正義を求める動きが水面下で着実に進められており、社会にその声を響かせる日が近づきつつある。

この活動は、2000年に東京で開かれた女性国際戦犯法廷の国際公聴会に参加したグアテマラのヨランダ・アギラルさんが、元「慰安婦」の勇氣ある姿に励まされたことから始まった。

2003年、UNAMG（グアテマラ全国女性連合）とECAP（社会心理行動共同体研究グループ）と共に「戦時性暴力被害者から変革の主体へ」活動を開始、国内3地域で約100名の被害女性が体験を語り合う場を作り、エンパワーと精神的ケアを行ってきた。2009年にはMTM（世界を変える女性たち）も加わり、3団体協同組織「アリアンサ」が「沈黙を破る女性たち」プロジェクトの活動を推進している。

不当な罪悪感や羞恥心を負わされ沈黙を強いられていた女性が、社会に対して真実を明らかにし、補償や加害者の処罰を求める意思を強めてきた。

2010年には戦時性暴力を裁く民衆法廷を首都で開催。被害者の直接証言や専門家証言に基づき、国軍が戦略的に用いた性暴力の国家としての責任を追及した。女性たちは自分たちの声に初めて社会の耳が傾けられた達成感を得ると共に、正義を追求する希望を高めた。

セプルサルコのケース

なかでも国内で裁判を起こすことに最も積極的なのが、イサバル県セプルサルコの15名のマヤ・ケクチ女性である。80年代初頭、軍により夫を連れ去られたうえ、強かんされ、家を焼かれ、81年から86年まで村に置かれた軍駐屯地で炊事や洗濯の仕事を強制され、さらに性奴隷にされていた。

この地域の弾圧の背景には歴史的な土地問題もある。ケクチ農民の土地を収奪した大農園や鉱山開発企業の利益を守る国軍は各農園に駐屯地を置き、土地への権利を求める農民への弾圧を強化したのである。

村では、同様の被害を受けた多くの女性や弾圧を生き延びた人々と、軍に加担した加害者が隣り合わせに暮らしている。過去に触れないことで表面的には均衡が保たれてきた。地域内で女性たちの取り組みについて知るのは、まだごく一部の協力者のみである。



サトウキビ畑で始まった秘密墓地の発掘作業

秘密墓地発掘

15名の女性たちのうち13名の夫が埋められていると考えられるティナハス農園元軍駐屯地の秘密墓地発掘を去る4月に実施した。その遺骨が見つかれ

ば、裁判で女性たちの証言の裏づけとなることが期待される。

発掘は専門家チームにより行われるが、遺族や地域住民の協力なくしては進められない。15人の女性たちと現在の夫や子どもたち他、多くの人々が土掘り、料理、情報提供などで協力した。砂地のため重機を使って掘り下げる必要があり、予定外に経費も嵩んだ。

初めの3日間は何も見つからず、絶望しかけていたアリアンサのメンバーに女性たちは「今朝のマヤセレモニーの炎は必ず見つかる」と言っていたから続けましょう」と声をかけた。その言葉どおり、その日から遺骨が見つかり始めた。

行方不明の家族の消息を求めたり、作業に協力するために、何時間も歩いてくる人もあった。この駐屯地から逃げ延びた男性も現れ、裁判への協力を申し出てくれた。

22日間の作業で13の穴から50人の遺骨を発掘、全て男性で拷問の跡を残している。身元確認には詳細な検査が必要となる。グループ以外の人たちが家族の遺骨を取り戻したり、正義を求める活動に発展する可能性もある。

最終日にはマヤのセレモニーが行われ、200人以上が参加した。発掘は15名の女性たちにとって大きな励みとなったと同時に、地域全体にとっても重要な意味を持つものとなった。

裁判プロセス

昨年9月の検察への告発により、被害女性15人と証人男性5人の証言を受け、検察はジェノサイドと人道に対する罪を追及する刑事事件として裁判所に告訴した。

当初はイサバル県地方裁判所の管轄にあったが、関係者の安全と、より適正な裁判プロセスを確保するため、首都の重度インパクト事件管轄裁判所への移送を要請し、受理された。



(上) 発掘された遺骨を前に祈る人々
(中) 目隠しをされ、拷問された跡を残す遺骨
(下) 発掘最終日のマヤセレモニー

また今年8月には、公判で加害者を前に直接証言することの困難や危険を考慮して20人全員の事前証言提出の認可と、アリアンサのケクチ・プロモーター3名を通訳、心理学者3名を精神的サポーターと

して認めるよう要請し、これも受理された。9月末には20名全員が法廷で事前証言を行い、その収録ビデオが裁判で使われることになる。

その後、容疑者を逮捕し、3ヶ月の証拠収集期間などを経て、裁判の開始は早ければ来年前半となる。容疑者には、地域の軍コミッショナー、兵士などの直接的加害者7名を挙げている。

8月27日、アリアンサと15名の女性とのミーティングに同行した。大半が50～60代、病気がちの女性もあり、一人は癌の治療中だ。裁判プロセスの説明や証言内容の確認を行い、当時の周辺軍事基地指揮官たちの写真から、女性たちが加害者として特定できる者を探した。

ECAPのプロモーターで裁判の通訳をつとめる予定のアリシア・ラミレスさんは、女性たちのケクチ語の言い回しを如何にスペイン語に訳すか、懸念している。例えばケクチ語で「兵士が私の身体をもてあそんだ」と言えば「強かん」を意味し、文化や言葉を共有する彼女たちの間では十分に理解し合う。ケクチ語には「強かん」という言葉自体がなく、上記のように表現する。しかしこれを法廷でスペイン語に直訳しても不十分で、さらに細部に亘って具体的に証言しなければ弱いと弁護士たちは見ている。

法廷は、女性同士で共有してきた場とも、民衆法廷の場とも違う。15人の女性たちにとって、新しい大きな挑戦となる。

今もつづく性暴力

2010年の民衆法廷の証言に、内戦終結から10年後の2007年のケースがあった。鉱山開発企業と土地の権利を争っていた地域住民の強制排除における性暴力である。

その後も同様のケースが続いている。前述の秘密墓地発掘を行なったティナハス農園は現在製糖企業に所有されているが、土地を求めて同社と協議中

だった周辺14コミュニティが昨年3月に強制排除された。またウエウエテナンゴ県バリヤスでは、水力発電開発への反対運動が高まり、今年5月に戒厳令が敷かれて地域住民が不当に逮捕された。こうした中で軍や警察による性暴力が横行しているのである。

住民の基本的な人権や先住民族の集団の権利を踏みじり、企業の利益を擁護するために軍や警察を投入し、様々な違法暴力行為と共に性暴力が使われている。内戦期の暴力の構造となんら変わるところはない。

今年1月に就任したペレス大統領はジェノサイドの罪を問われるべき元軍人であり、現政府はジェノサイドがあったことを完全否定している。軍関係者は軍人に対する裁判への反対キャンペーンを展開し、内戦中のゲリラによる事件を告発し、元軍事基地の秘密墓地から多数の遺骨が発掘されるとあからさまな脅迫を始めるなど、不穏な状況である。

アリアンサでは、性暴力に関する社会一般及び司法関係者の意識化や、女性たち自身の問題意識強化、他組織との協力関係による情報共有や安全対策強化などにも努めている。

セプルサルコの裁判は、多くの女性たちに勇気を与えてくれるだろう。判決の日、民衆法廷を終えたとき以上に明るい笑顔の彼女たちに会えることを願いたい。

(そんりさ123、124、125、131、137号に関連記事あり)

沈黙を破ってーグアテマラ戦時下性暴力スピーキングツアーー

講演者 アリシア・ラミレスさん紹介

RECOMでは、「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」から「沈黙を破る女性たち」として続く女性たちの活動を支援しています。民衆法廷や秘密墓地発掘などに協力し、継続的に活動の情報を得て『そんりさ』上で紹介してきました。

今年11月には、ECAP（社会心理行動と共同体研究グループ）のファシリテーターとして被害者をサポートしているマヤ・ケクチ女性、アナ・アリシア・ラミレス・ポップさんを日本に招聘し、各地の講演会で皆さんと様々な視点から経験を共有していただきたいと思います。被害女性に最も近く寄り添い、支えとなっているアリシア・ラミレスさんが「沈黙を破る女性たち」の声を届けてくれます。ぜひ講演会にご参加ください。以下に、プロフィールを紹介します。



- 1976年、アルタベラパス県サン・フアン・チャメルコ市カキハ（赤い川）村にて、農園労働者家庭に生まれる。
- 1982年、内戦下の軍による弾圧を逃れ、家族と共に村を出てコバン市に移る。
- 1999年、高校卒業後、ケクチ地域の子ども司牧会で初等教育支援のボランティア活動を行なう。
- 2000年、大学の法学部に入学。
- 2001～2005年、マヤ組織で活動し、内戦被害者の状況を深く理解する。マヤの宇宙観を基盤として、秘密墓地発掘、歴史的記憶の回復、メンタルヘルス、人権などのテーマで活動する中で、内戦の生き残りである両親や自分の歴史、マヤ民族の苦難の歴史について認識するようになる。同時期、ECAPとグアテマラの国立大学が実施する「コミュニティ・メンタルヘルスと人権」2年間コースを受講する。
- 2006～2007年、行方不明者の家族の会（GAM）で、ケクチ地域内戦被害者へのメンタルヘルス活動を行なう。
- 2008年～現在、ECAPのファシリテーターとして、戦時性暴力被害者の女性たちをサポートし、人権や女性の権利尊重、女性への暴力をなくすために活動する。「沈黙を破る女性たち」の活動として2010年3月に開催した民衆法廷でに貢献する。
- 現在の中心的活動テーマは、性暴力被害者のケクチ女性15名が正義を求めるプロセスへの同行・サポートと、中学生を含む地域住民と行なう歴史的記憶の回復である。

ー眠っているデジタルカメラはありませんかー

性暴力プロジェクト、グアダルーペ組合、コマラパ青年組織などでそれぞれの活動の記録のためにデジタルカメラを必要としています。また、ハンディなデジタルカメラは環境活動のツールとして、また人権侵害時の告発にとても役立ちます。もしお宅に使わず眠っているデジタルカメラがありましたら、これらの活動のために寄付してください。

連絡は recom@jca.apc.org までお願いします。

グアダルーペ組合 視察報告

新川志保子

コミュニティ教育

3月に続いて、さる9月7～8日、チマルテナンゴ県ポアキルのグアダルーペ組合を訪問、その活動を視察しました。（そんりさ137号で報告）

訪問したのは、大阪司教区シナピスコども基金の支援で実施しているコミュニティ教育です。今年1月より、パラヤ、ポアキル、パネヤの3カ所で毎週土曜日に開いています。各クラスに教師1人、子どもは35人（小学校1～3年）です。

クラス訪問にはグアダルーペ運営委員のほか、アドバイザーのフリーオさんも同行してくれました。最初に行ったのはパラヤ。紙に動物の絵を書き、それをハサミで切り抜くという授業をしていました。動物の名前と特徴を覚え、道具（ハサミ）を使うことを覚える、というものです。子どもたちは真剣な表情で切っていました。

次に訪れたポアキルのクラスでは、無脊椎動物をテーマに粘土の授業をしていました＝写真。背骨がない動物について覚えながら、子どもたちが昆虫やカタツムリなどを粘土で作るといいます。

いずれのクラスも子どもたちはとても元気に大きな声で受け答えしていました。前回訪問時よりさらにリラックスした感じで、子どもたちもクラスによく馴染んでいるようでした。

土曜学校がどのくらい役立っているか。例えば小学校では20以上数えられなかった子がすぐに40まで数えられるようになった、一桁の足し算が小学校では1週間やっても覚えられなかった子が土曜学校では2時間で覚えた、というケースがあったそうです。小学校と土曜学校の教え方の違いについてフリーオさんの説明を聞いて、グアテマラの小学校教育の構造的な問題点も浮かび上がりました。

第一に教師の質が低いこと。通常、中学を終えたあと教員養成学校（3年）に行けば教員免許が取れ



ます。そして、教師の給料が低いこと。初任給は月約25000円程度、日本よりは物価の安いグアテマラですが、これだけで生活するのは難しく、大抵の教師は午後別の仕事をしているそうです。クラスは通常朝8時から正午まで。そのあとの時間を授業の準備につかう人はわずかで、ほとんどはすぐに次の仕事に向かいます。つまり、よほどやる気がなければ良い授業はできない、ということです。

勉強ができない子が多い理由は、授業がおもにスペイン語のために理解できないことがあります。他にも足し算引き算や九九など黒板に数式を書き、子どもたちにそれをそのまま暗記させる、というような教師にとって手間のかからないやり方が多いから、ということです。説明もよくわからないまま丸暗記しなければならないわけで、なるほど落第する子どもが多いのも納得します。

それに対し土曜学校では、地域の言葉（マヤ・カクチケル）で教師が説明し、遊びながら覚える、好奇心を持たせる方法を使っています。石や木の枝、葉っぱといった身近なものを利用するなど、子どもたちが実感し、納得する方法をとっています。

土曜学校では、小学校に行っていない子も受け入れています。農作業や家の手伝いをさせるために親が子どもを学校にやらない場合もありますが、お金がかかりすぎることも子どもが学校に行けない大き

な理由です。小学校は義務教育で無償ですが、学年が始まる時にいろいろな名目で徴収される費用があり、それが大体1500ケツアル（約16000円）になるとのこと。子どもが何人もいれば貧しい家ではとても払いきれません。やりたくてもやれない、あるいは1人か2人だけ行かせる、ということになります。土曜学校は、そういう理由で学校に行けない子どもの受け皿にもなっているのです。

クラスの時間は当初午前8時から夕方5時でしたが、長すぎるのがわかり短縮しました。現在は雨季でもあり、子どもを早めに帰すようにしているとのこと。今は午前8時から正午まで授業で、それから給食を食べて、子どもたちは帰宅します。

新たに出てきた問題点もあります。予算外の支出があることで、授業が進むにつれて子どもたちが使う文房具も増えています。給食も材料が値上がりしており、最初の予算でまかなうのは厳しいようですが、いろいろ工夫してなんとかやっているとのこと。給食はかならず肉と野菜を入れ、バランスを考慮しているそうです。給食はやはり子どもたちにとってとても大きな楽しみです。

最後に訪問したパネヤ村では、グアダルーベ組合とお母さんたち、子どもたちが私たちの歓迎会をしてくれました。お母さんたちが用意してくれた心づくしの昼食を頂いたあと、子どもがダンスや歌、詩の朗読を披露してくれました。村役場の人や開発委員会の代表なども来てくれて、この土曜学校がとても役に立っていることを改めて感じました。

マイクロクレジット

日本からの支援でグアダルーベ組合が始めたもうひとつのプロジェクトがマイクロクレジットです。日本キリスト教協議会女性委員会による世界祈祷日献金よりいただいた33万円を使って始めました。

女性たちは非常に貧しい暮らしをしており、伝統的な手織りの民芸品を作ってなんとか生活をたてていましたが、近年の不況でそれが売れなくなり、他



野菜を売る商売を始めたサンホセポアキルの女性

の収入を探さなければならなくなっています。が、そのための融資を受けることもできず、貧困から抜け出すことがほとんど不可能な状態にあります。これら女性たちが収入を増やすための支援として小規模マイクロクレジットを開始したのです。

このプロジェクトは、グアダルーベの運営委員が、長い経験と実績を持つNGOを訪ね、彼女たち自身がマイクロクレジットの仕組みを理解し、運営のノウハウを覚えることから始まりました。そして貸付の条件や利子をいくりにするか、返済の期間と頻度、などを決めていったのです。利子は年16%と決めました。貸付は組合員から選び、融資金で何をするかを相談し、それが利益を見込める現実的なものであるか、などを確認します。

そして6家庭を対象に、それぞれ5,180ケツアル（約52,000円）を貸し出しました。借り手はそれを元手に小さな商いをします。借りて2ヶ月後より利子と元金の返済を開始し、回収金のうち6%は管理運営費用に、6%はマイクロクレジット資本、残り4%は準備金とします。資本金はある程度たまったところで、新たに貸付を行い、回していきます。

この貸付で始めた商売は、野菜売り、織物用の糸販売、薬草販売、などです。今のところ順調で、商売を始めた女性たちは収入を増やしているそうです。返済も遅延なく行われています。

天然染色 マヤ女性へ伝授

村岡貞夫

RECOM会員の皆様初めまして、グアテマラ共和国ソロラ県サンティアゴ・アティトラン市。縁あってこの地に移り住み始めたカバ（私のあだ名です。逆から読んでいただいて結構です）が、失われたはずの天然染色を今の世に蘇らせようという素敵な試みについてお届け致します。言葉足らずで失礼なことを書いてしまう事もあるかもしれませんが、寛容なる精神でご笑覧下さることを願っております。何卒、宜しくお願い致します。

皆さまはグアテマラ国首都在住の天然染色研究家の児嶋英雄さんをご存知ですか？ 美大卒業後に日本の広告代理店に勤務、その後メキシコに船で渡り、マヤ人の末裔が今も華やかな衣装に身を包むグアテマラに住み着いて40年以上……そして、19世紀、化学染料台頭と共に途絶えてしまった中米の天然染料に関する研究を行い、隣国エルサルバドルで天然藍産業を見事に復興させる一助となり、2011年度に日本国の外務大臣賞を受賞された方……そんな私達の先輩である凄い日本人が「中米に自生する天然染料で染める天然染色技術を、先住民であるマヤ人の皆さんに知ってもらい生活の糧にしてほしい」と考えたのがこの度の素敵な試みの始まりでした……

児嶋先生（普段通りの呼称で書くことにしましょう）との出会いは、2009年に某組織シニア・ボランティアとして、同じソロラ県のある村で行われている天然染色手織物品のマーケティング活動のお手伝いをするために赴いたことがきっかけでした……数ある婦人グループの工房を訪ねること半年間、とても残念なことに、ウリとしているはずの天然染色製品の低品質を実感した後、タイミング良く県都ソロラ市で開催された児嶋先生の研修会に参加できたことにより、全ての事柄が鮮明になりました。



婦人グループの人々と児嶋先生とかば

「ちゃんと染まっていない物を天然染色と称して売るべきではない」この一語につきたのです……

さて、ここで皆さまにも少々考えて頂ければ幸いなのですが、布や糸が染まるとか染まらないとか……いったいそれはどういうことなのでしょう？

それを知るためには化学基礎知識が必要となります。些か手短かに説明致しますと、染色とは、染料と繊維が分子間レベルで親和性（くっつく）を持つ現象を指すことになり、その染料分子と繊維分子との間の親和性が弱い場合は、二者を仲立ちする媒染剤が手助けとなってきます。つまり、どんな繊維に天然染色を施すかによって染色方法が変わってくることになります。ここグアテマラ界限の手織物製品の主流は綿ですので、羊毛や絹に比べて親和性が弱く、媒染剤の手助けを必要とするにも関わらず、アティトラン湖界限のソレときたら天然染液らしきものに浸しただけで仕上げてしまう、自己流ナンチャッテ天然染色が横行していました。その結果、直ぐ退色してしまうが、い物を実際に販売していたことから、天然染色を基礎から学びなおし、根本から改善する必要があるが大いにあったのでした。

そこで、児嶋先生のご協力を頂き、天然染色研修会を幾度か開催することになります。研修会では、鮮やかな色合いの数々、藍染めの不思議、色褪せの無い仕上がり、研修した現地の人から終始感嘆の声が上がりました。また、それをマフラーに仕上げたものなどは外国人観光客にも評判が良く店頭で瞬く間に売れたものでした。そんな様子でしたから、アティトラン湖周辺マヤの人々にとって、研修会のインパクトは想像を超えるものであり、児嶋魔術などといった声も囁かれるようになっていったのです。

そして、同様に感銘を受けたサンティアゴ・アティトラン市のご婦人達は実際に立ちあがりました。貧困脱出、天候に左右されてしまう農業以外の収益源確保、伝統工芸活性化、産業基盤確立、生活改善と想いは膨らみます。市の要請により、在グアテマラ日本大使館・草の根援助資金（建物などハード面援助する為の資金でソフト面は対象外）を戴き、児嶋先生のアイデアである「天然染色研修センター」の建築に乗り出したのです。

しかしながら、そこにいくつかの課題が浮上することになります。2012年3月、私は再びグアテマラに降り立ち、サンティアゴ・アティトラン市に拠点を置きました。

様々な現状が解ってきました。ソフト面の目処が立っていないことが明らかになりました。予算不足です。そして、……具体的にどんなことを行うの？ 誰がどの様に教えるの？ 知った技術をどう使うの？ 研修センターの運営はどの様に？ 準備品は？ 電気は？ 水は？ 排水処理方法は？ お金は誰が？ 加えて、一斉選挙による市役所の政権交替が影響していて、婦人グループと市役所新体制との協力関係も微妙でした。

半年が過ぎ、わずかながら目処が付いてきました。希望に向かって少しずつ少しずつ前進している



手織りをするサンティアゴの職人

のは確かですが、準備が整い次第、可能な限り早く開設することが望まれます。

研修センターを中心として適正天然染色技術が定着し、適正な縫製技術やデザインを生み出す基礎習得も必要です。それらを売り出していくための戦略や品質保証も重要です。嘘をつかない製品、消費者に品質と価値を伝える事のできる製品、そこに製品ファンが誕生し、製造者の手元にお金がちゃんと戻ってくる仕組みづくりが行わなければなりません。

そして、私達は天然染色センターのソフト面充実を目論みJICAの草の根資金獲得に向けて動き出しました。それに加えて、皆さまからの資金面サポート情報もお待ちしています。

この天然染色研修センターを中心として今後どのような展開が待ち受けているのか、こちらの誌面をお借りして様々報告させて頂くことになるかと思えます。

また、ブログ・manos・ウニカス (<http://manosunicas-cava.blogspot.com/>) においても、現地の様子を紹介しておりますのでご支援頂ける事を願っております。

次回の報告をお待ちください。失礼致します。

日本ラテンアメリカ子どもと本の会 (CLIJAL) について

伊香祝子

はじめに

日本ラテンアメリカ子どもと本の会は、日本とラテンアメリカの人びとを、子どもの本を通じてつないでいきたいという思いで、2009年に結成されたボランティアのグループです。メンバーは、スペイン語やポルトガル語文学の翻訳や、スペイン語圏の文化などの紹介に携わる人、また、子どもの本の作り手、図書館関係者などからなっています。

結成の背景

私たちがこのようなサークルを結成したのは、この20年近くの間、日本に住むラテンアメリカにつながる人びととその子どもたちの数が増えたことにあります。1990年の入管法の改定によって、南米の国々から多くの日系の人たちやその家族が来日し、この国で働くようになりました。

なかでももっとも多いブラジルとペルー二か国の外国人登録者数は、一時期には37万人を超えました。最初は日本を単なる出稼ぎ先と考えていた人たちのなかにも、家族を呼び寄せる人、日本で結婚し子どもが生まれる人も出てきました。子どもたちのなかには日本の学校に通う子どももいましたが、ブラジル人学校や通信教育などで、ポルトガル語やスペイン語で教育を受ける子どもたちもいました。しかし、2008年秋のリーマン・ショック以降、仕事がなくなった親と一緒に帰国する子どもや、通っていた民族学校が閉鎖される子どもたちがでてきました。2011年末の統計では、二か国の登録者合わせて27万人（ブラジル21万人、ペルー5.2万人）ですが、年齢層でみると0歳から19歳の滞在者数が全体の2割強で、子どもの教育がコミュニティの大きな関心事となっていることがうかがえます。

日本にくらす子どもたちが感じる不自由はさまざまです。学校では、親たちが日本の教育制度をしら

ないために起こる問題、個性を認めず“マジョリティ”の文化をおしつけるような風潮、言語の問題が原因で起こる学力不足。また、出身国でスペイン語やポルトガル語で教育を受けた親世代との間での、家庭内でのコミュニケーションの問題など。そんなようすを見て、私たちは「本」を中心にして何かできることがあるのではと考えるようになりました。なぜなら、本は自分をうつす「鏡」や、広い世界への「窓」となって読む者に生きる力を与えるばかりでなく、おとなに読み聞かせをしてもらう、絵本などで文字にふれるといった体験は、子どもにとって日本語または継承語での識字能力を育てるうえでとても大事だと考えたからです。

とはいえ、個人で洋書を取り寄せるのは決して簡単なことではありませんし、公共図書館の外国語サービスは、一部の集住地域では熱心な取り組みがされているものの、児童書まではなかなか手がまわらないというのが実情です。すでに多くの方たちが、子どもたちの補習やさまざまなサポートに取り組んでおられますが、子どもの本を通してのアプローチはまだ少なく、私たちに手伝えることはないだろうかと活動を始めました。

図書展の開催

活動を始めるにあたって、私たちはメンバーそれぞれの経験を持ち寄り、また、子どもたちの現況を知るために、専門家や支援ボランティアの方たちのお話を聞き、学校などにも足を運びました。そのなかで気づいたことは、子どもたちをとりまく日本人びとのあいだで、まだまだラテンアメリカのことが知られていないということでした。（ラテンアメリカに限りませんが）

その原因のひとつとして、テレビなどの大きなメディアが流すラテンアメリカの情報が、古代遺跡や

アマゾンの自然、カーニバルなど、目をひきやすい限られたものになりがちがあります。そこで私たちは、日本で出版されている、人々の暮らしぶりや文化、心情、歴史などを伝える子どもの本を皆で読みあって、おすすめしたいと思ったものを展示することにしました。選書にあたってはインターネット上の非公開の掲示板を利用し、およそ10名で1年半ほどかけて、5回の選書会議を重ね108冊のリストを作りました。展示する本には、保護者にも配慮して日本語、ポルトガル語、スペイン語の3カ国語の解題をつけました。

そして、これらの本を、日本人と在日のラテンアメリカ出身の人びとが同じ場で分かち合ってもらうため、ブラジルやペルーにつながる住民が多く、多文化共生に先進的な取り組みを行う横浜市鶴見駅前にある区立のギャラリーを会場に選びました。子どもゆめ基金からのご支援をうけ開催された12月22、23日の「開いてみよう!見てみよう! 子どもの本でラテンアメリカめぐり展」では、本とともに、風景や人の写真、民芸品を展示してラテンアメリカの雰囲気を感じてもらい、本の内容にもとづくクイズラリー、スペイン語やポルトガル語で書かれた絵本を自由に読めるコーナーや、切り紙、心配引き受け人形といった絵本に登場する手仕事の文化を紹介し、実際に自分で作ってもらうワークショップを実施しました。また、日本とボリビアふたつの国をルーツにもつ少女を主人公にした『わたしはせいかガブリエラ』（福音館書店）の作者東郷聖美さんと一緒に絵を描くという企画や、読み聞かせ、日本で出版されたコロンブス関連の児童書を通して歴史を知るための展示も行いました。この様子は会のブログ（文末にURL）でご覧いただけます。

2日間の来場者はおよそ260人。親子連れや地元ブラジル人学校の生徒さんたちも来場してくれましたし、横浜市内だけでなく、都内、関西地方のラテンアメリカ出身者の支援にたずさわっている方々や、ラテン・コミュニティのなかで子どもの支援に



かかわる先生やお母さん、展示された図書の著者の方や司書の方、学校の先生、日系ブラジル人向けのテレビ局、出版関係者など多くの方が熱い関心を寄せてくださいました。

今年3月には、大崎で開催された子どもの本の日記念フェスティバルに参加しました。こちらでは、鶴見で展示した図書を使い、ペルー出身のカルメン・ディアスさんや、ブラジルの絵本の翻訳者松本乃里子さんにご協力をいただいて、ペルーの昔話の語りや、絵本『やんちゃなマルキーニョ』（ジラルド作、静山社）の読み聞かせ、お人形づくりのワークショップなど、小規模ながら充実したものになりました。

これからの活動

こうした本のセットの貸し出し（今秋は愛知県内の小学校で1か月間の図書展が予定されています）のほかにも、これまでの活動のなかで出会った方たちから、ラテン・コミュニティを対象としたお話会や、国際交流イベント、図書館の選書に関するご相談なども受ける機会が出てまいりました。小さいグループではありますが、米国やカナダで出版されているようなバイリンガルの絵本の製作にもいつか取り組みたい、と大きな夢も抱いています。こちらのニュースレターでも、今後ラテンアメリカの子どもに関する情報などを紹介していきたいと思いません。どうぞよろしく願いいたします。

ブログ <http://clilaj.blogspot.com/> twitter @clilaj

第63景

グアテマラURNGが党大会で〈脱皮〉決議

グアテマラでは、マヤ系先住民が人口の圧倒的多数を占めながら、なぜボリビアがエボ・モラレス大統領を生んだように、「先住民の大統領」を生み出せないのか。1996年末に内戦が終結してから16年、今世紀に入ってからリゴベルタ・メンチュエが大統領選挙に2度出馬したが、いずれの場合も得票率は3%台で惨敗している。

今年5月新たに来日した、コナビグアのロサリーナ・トゥユクは、インタビューした際、支配階層による伝統的な〈言語別〉分断工作、それによるマヤ人多数派意識の希薄さ、貧しさと無学と疎外により簡単に買収され票を売り渡してしまうこと、左翼陣営の資金と運動の不足、強烈なカリスマのある指導者の欠如、支配当局による弾圧と妨害、などを理由として指摘した。

しかし、先住民の政治勢力と連携する、先住民を含む旧ゲリラ組織の政党「グアテマラ民族革命連合」（URNG=ウエレエネへ、1998年発足）にも当然、問題はあはずだ。政府軍・警察を相手に内戦を戦った一方の当事者だったからだ。私は7月下旬、グアテマラを短期間訪れ取材した。URNGは、1ヶ月後の第3回党大会に向け準備していた。この党大会は8月24～26日、グアテマラ市のホテルで開かれた。

「ゲリラ連合URNG」の結成30周年でもあり、「団結を堅固にした30年」が標語として掲げられた。700人の代議員が出席し、「権力到達のための戦略」を討議した。その結果、次のような決議が採択された。

1、グアテマラの再建—マヤ人をはじめとする大多数の人民が排除されている現在の国家を変革し、誰も排除しない国家社会を建設する。この歴史的課題に取り組むため、「社会政治移動学校」を全国で常設的に展開させる。

2、新しい政治主体としての先住民・女性・若者—マルクス・レーニン主義は「もう一つの押しつけ」だった。マルクス主義の「脱欧州化」が急務だ。階級闘争ではもはや展望は開けない。グ

アテマラでは労働者階層が欠けているだけでなく、闘争の主体が先住民・女性・若者だからだ。彼らをマヤ民族であるゆえに忌み嫌うとしたら、それは病気と言わざるを得ず、病気の民族に革命など望むべくもない。

3、社会運動の政治的手段になること—これまで党勢を拡大できなかったのは、内戦中に身に付けた軍事的論理が働いていたからだ。党の無能ぶりに嫌気のさした元ゲリラの多くは政治的無関心に走り、そのかなりの部分が聖霊降臨祭派（ペンテコスタル）に加入した。こうしたことから代議員は、党の社会化を要求した。国内のさまざまな社会的議題や闘争を自らのものとする戦略を持つべきだと。内外の戦闘的な社会運動と断固連携すべきだ。党員は社会運動に対し能動的ではないが、変革が必要だと思うなら社会勢力や先住民勢力のなかに積極的に入っていかなければならない。党は、この多民族国家解放のため、社会運動のための政治的手段にならねばならない。

4、その他：党内民主主義の民主化。中央指導部と全国下部組織との間に水平的関係を構築すること。独自のメディアを設け情宣活動を行うこと。いずれも困難な事業だが、これをやらなければ、党は他の組織に取って代わられてしまう。人民多数派の苦悩と「南の風」は、我々を待っているはくれないからだ。

[党大会には、ESのファラブンド・マルティ民族解放戦線（FMLN）、ニカラグアのサンディニスタ民族解放戦線（FSLN）、キューバ共産党（PCC）、ベネズエラ統一社会党（PSUV）、ボリビアの社会主義運動（MAS）、ウルグアイの拡大戦線（FA）、ブラジルの労働者党（PT）のラ米7カ国政権党代表団が招かれて出席した。メンチュエも出席した。]

月刊LATINA誌10月号（9月20日発行）の伊高浩昭執筆「ラ米乱反射」はニカラグアルポ『21世紀型社会主義に変身したニカラグア』です。なお8月20日発行の同誌9月号乱反射は『数奇な延命を辿ったエバ・ペロンの永久保存遺体』です。

アイマラ民話 月は男の子だった

ボリビアのアンデス高地にあるワイチュという町には一つの伝説があります。遠い昔、月は男の子だったそうです。昔々、太陽と月は双子の兄弟でした。ある日、両親は兄弟をおいて家を留守にしました。出かける前、両親は二人に、料理を作っておくようにと、良く言い聞かせました。

ところがその日、二人の兄弟は台所で喧嘩をし、太陽はかまどの灰を、月の目に向けて投げつけました。そのために月は以前ほど輝けなくなると言います。午後、家に帰った両親は、二人の喧嘩を知ると、たいへん怒って二人を叱りつけ、太陽と月を二人とも家から追い出しました。それ以後、太陽と月は空を回り続けていると言います。

双子の太陽と月は、このことをとても後悔して、泣きました。夜空に輝く星々は、彼らの涙だと言います。明るい星は太陽の涙です。暗い星は月の涙です。それ以後、太陽は、ウィジュカ（アイマラ語では、「投げつけた」という意味です）と呼ばれるようになりました。月は、その眼をかまどの灰で拭かれた、という意味でパクシ（アイマラ語では、「拭く」という意味です）と呼ばれるようになりました。

今でも、太陽と月は泣き続けています。ですから夜空の星は数えきれないほどに増えたのです。その後、それ以上星の数が増えないように両親は、二人をそれぞれ、蛇の輪で囲んだと言います。ですから、しばしば太陽にも月にも虹の輪がかかったように見えるのです

この話は、この地をインカ帝国が支配する以前から言い伝えられている、と言います。この話の伝えられている、ワイチュの町の間々には、スミアウキ、ルマルマニ、フチルニ、スウィルニなど、変わった名前が付けられています。ですからこの話は、アイマラ族がこの地に住む以前の、プキナ族、あるいはウル族からの言い伝えかもしれません。

語り：オスカル・チャンピ

ラパス県、ワイチュ村、プエルトグランデ
ボリビア教育省刊行「ウィニヤイパチャ」

2010年6月号より

訳：栗原重太

ミゲル先生のメキシコ食巡り ナスとニンニクのクリームスープ

SOPA CREMA DE BERENJENA Y AJO

以前のソマリサでも説明しましたが、メキシコ料理は「世界遺産」に認定されています。

スペイン人の征服以前からの数千年の歴史と、世界のさまざまな素材や料理法を取り込んだことが、メキシコの料理文化を豊かなものにしました。

ユカタン地方の料理は、アラビアやトルコ、レバノンの影響をととても深く受けています。そのひとつが、栄養たっぷりで手軽でおいしい「ナスとニンニクのクリームスープ」です。

エジプトやモロッコ、レバノン、シリア、トルコなどの国でも、このスープはよく食卓にのびります。

私の母はしばしばこのスープをつくり、私たち兄弟も、学校のない土日や祝日には料理を手伝いました。

ユカタンでは、結婚式や女の子の15歳のお祝いのパーティにも出されます。

ちなみに15歳の誕生日を盛大に祝うのは女の子だけで、時には結婚式以上に盛り上がることもあります。ユカタンのバーでは、ビールを頼んだらこのスープが付け出しとしてついてくることもあります。



マヤ系先住民民族もまた、結婚式や15歳の誕生日、家族の集まりにこのクリームスープを食べています。

一般に、小麦でつくった円形のアラビア風のパンを添えます。メキシコのトルティーヤやピザ用のパンに見た目は似ていますが、中は空洞です。これが入手できなければ、フランスパンや食パンでもかまいません。

ナスやニンニクなどの材料は日本では簡単に手に入るなので、来客があったときにつくってみてください。子どもも含めて、みなさんに喜ばれるでしょう。

■材料 4人分

- ・ナス中 4本
- ・ニンニクペースト 大さじ1/2杯
- ・牛乳 500cc
- ・塩 コショウ
- ・クリームチーズ 大さじ1杯

■作り方

1) ナスの皮をむき、2センチ程度に輪切りにする

- 2) ちょっとやわらかくなるまで、10~15分茹でる。
- 3) ざるで水を切り、軽くしぼる
- 4) チーズと牛乳とニンニク、塩、コショウといっしょにミキサーにかける
- 5) 鍋に移し、焦げ付いたり吹きこぼれたりしないようによく混ぜながら火にかける。
- 6) 深めの皿に入れて、パンといっしょにどうぞ。

エクアドル サラヤク民族がエクアドル国家に違法石油開発で勝訴

米州人権裁判所は7月25日、エクアドル国家に対して提訴されていたアマゾンのサラヤク・キチュア民族テリトリーでの石油開発問題で、「事前に住民に対して説明がなく承認も得ておらず、テリトリー内で強力な破壊力を持つ爆発物の使用により先住民族の共有財産と文化的アイデンティティという権利を侵害した」という理由で国の責任を認める判決を下した。

エクアドル政府は1996年に米国のシェブロン社とバーリントン社の子会社であるアルゼンチン企業CGCにアマゾンの先住民族テリトリーであるパスタサ地域での石油調査・開発権を譲渡したが、地域住民には事前の説明もなく、承認も受けていなかった。このため住民は2010年に米州人権委員会に提訴していた。米州人権裁判所はエクアドルに対しサラヤクに賠償金140万ドルの支払いと、テリトリー内に設置されている爆発物の撤去を命じた。エクアドル政府はこの判決を遵守することを表明した。(Noticias Aliadas, 28/08/2012 より)

ラテンアメリカ 都市増加と貧困

国際連合人間居住計画（ハビタット）によればラテンアメリカは世界で最も都市が増加している。雇用や生活状況が改善されているにもかかわらず、社会、経済、環境のコストがとても高く貧富の差が大きい。

長年にわたる農村部からの移住の結果、人口の約80%にあたる4億6800人が都市に住んでいる。ラテンアメリカの都市は、貧富の差や人種差別などの問題を抱えるスラムが急増することで無秩序に発展してきた。国連によれば、こうした問題をなくす取り組みがなされないまま、とりわけ周縁地域での都市増加が問題になっている。ラテンアメリカで生じる富の3分の2が都市で産出されるにもかかわらず、4分の1の人々が貧困にあると報告されている。1億1100万人が周縁地域に住んでおり、暴力、治安の悪さ、貧富の差に関する指数が高い。しかしこうした問題は都市だけではない。ラテンアメリカではこの60年間、急速に都市化してきた。都市の増加が人口増加よりも早く、そのためインフラや行政サービスのコストが値上がりするなどの問題が生じている。解決策の一つとして高層住宅の建設がある。都市がまとまることで、効率よく環境にも負荷をかけない土地利用ができる。開発のために農地をつぶさず、都市がコンパクトになることで行政サービスが届きやすくなりコストも下がる。都市改革は貧困対策に特化した公共政策を通して進められている。(BBCMUNDO/2012/8/22より)

メキシコ 刑務所から集団脱走—麻薬組織が関与

メキシコ北部、米国国境に近いコアウイラ州ピエドラス・ネグラスの刑務所から131人の囚人が脱走した。史上2番目の規模の脱走で、麻薬組織が関わっている。メキシコの刑務所は麻薬組織のリクルート場所になっているという説もある。

メキシコでは過去7年間に複数の刑務所から700人以上の囚人が脱走している。ほとんどは麻薬密輸組織ロス・セタスが活動する地域にある刑務所だ。刑務所は、危険な囚人が一般犯罪の囚人と混ざっており、セキュリティも弱いため、麻薬組織が内部をコントロールするのが容易だと指摘されている。そして組織に役立つメンバーを刑務所から救出するほうが新たにメンバーをリクルートし訓練するより安上がりだという。実際ピエドラス・ネグラスから脱走した囚人の多くはロス・セタスのメンバーだった。刑務所の中では麻薬組織間の争いもある。ロス・セタスのメンバーは脱走時に刑務所内でライバル組織ゴルフ・カルテルのメンバー4人を殺してもいる。

メキシコの刑務所の問題も見過ごせない。多くの刑務所では、囚人をコントロールすることすらできないからだ。(BBCMUNDO/2012/9/18より)

前回138号から「そんりさ」を横書きに変えました。が、印刷時の不手際から、ページの右と左が逆になってしまい、非常に読みづらいものになってしまいました。申し訳ありませんでした。

今回からはあるべき形になっていますが、レイアウトやフォントなど、さらに読みやすくするために会員の皆さんからのアイディアも大歓迎ですので、お気づきの点がありましたら事務局までお知らせください。

さて、11月には3年ぶりでグアテマラ・スピーキングツアーを行います。北海道から九州まで全国を縦断します。ぜひ最寄りの講演会にいらしてください。アリシアさんと一緒に皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。(新川 志保子)

次回の「そんりさ」発送作業は 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.138 パナマ先住民族ンガベとブグレ

Vol.134 グアテマラ・ニカラグア報告

Vol.137 グアテマラ視察報告

Vol.133 グアテマラ総選挙

Vol.136 ボリビア先住民族政治と道路建設

Vol.132 ボリビア・ガソリン危機

Vol.135 あるコロンビア難民の死

Vol.131 エクアドル・アマゾン石油開発

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・
FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

64万1169円

<グアテマラ基金>

35万442円

(2012年9月現在)